



あやこつうしん

岐阜市子ども・若者総合支援センター
“エールぎふ”親子教室 (1歳児)
令和3年1月

♡やってみるから、みててね♡

親子教室から帰るとき、自分の靴と大人の靴を、床に置いたり、大人に渡したりする姿が見られます。子どもは、大人が履くところを見たり、自分も履かせてもらったりした経験から、靴を履くことに期待感があるのでしょう。「私も出来るよ!」「私がやってみよう。」という心の声も聞こえてきそうです。

子どもが靴を出してくれたら、「靴を出してくれてありがとう。」と言うと、認めてもらえた喜びで今度は自分で靴も履きたくなります。全部できなくても、大人が足を入れやすいように靴を持ったり、マジックテープを止める“仕上げ”を子どもにやってもらったりして、やりたい気持ちを受けとめてみましょう。すると、子どもは“見てくれている”“やる気を認めてもらえた”と感じます。お世話をしてもらう小さい自分から、生活の主人公である大きい自分になりたい、という気持ちが育つ時期なのです。これらの感情は、今後の自立心や自我の育ちへつながっていきます。



時には、やる気はあっても上手くいかないこともあります。生活のスキルは、大人から見ればまだまだです。「やりたかったね。」と子どもの気持ちを代弁してもらったり、慰めてもらったりすると、“またやってみようかな”と立ち直る力が蓄えられていきます。



♪大人は安全基地になろう!♪

親子教室の時に、子どもがボールを取りに行こうとしたら、友だちがスッと持って行ってしまいました。ある時は、遊んでいる時にスッターンと転んでしまいました。そんな時、大人のあったかい懐に入り込みたくて、抱っこを求めてきます。一人で歩けるようになり、汚しながらも自分でごはんを食べるようになったのに、いつまで抱っこ?と思うときもあります。でも、子どもはボールが目の前からなくなってしまった時の悲しい思いや、転んだ時の痛かった思いを受けとめてほしいのです。大人は「そのくらい大丈夫。」「痛くない。」と言うのではなく、子どもを抱きしめながら「遊びたかったんだねー。」「痛かったねー。」と気持ちを代弁してあげましょう。子どもは、大人が自分の気持ちをわかってくれ、“何かあったら戻れば大丈夫!”と安心できると、自分の気持ちを立て直し、再び遊び始めます。



親子教室では、子どもの発達のお土台づくりのためには、“親子のふれあい遊び”が、大切であると考えています。“楽しい”“もっとやって欲しい”という子どもの思いは、伝えたい相手がいるからこそ生まれるため、活動中に、大人から「もう一回?」と何度も子どもに聞きます。親子教室では、もうしばらく抱っこ、くすぐり、ゆさぶりなど、大人と一緒に楽しむ遊びをしていきます。